

第1群の座長をつとめて

天 津 栄 子

(内灘温泉病院)

第1群3題は、がん患者の看護に関する事例研究であり、それぞれの焦点は褥創、家族への援助、食欲不振についての演題であった。

演題1.「褥創ケアの一考察」(西尾清子さん)は、食道がんで血管再建術後の出血による安静保持、併せて全身状態の悪化により褥創形成に至った事例に対し、褥創の深度別(I期～III期)に褥創ケアを行って、発生より5か月後に褥創完治した報告である。褥創I期に使用したHCD (Hydro - Colloid - Dressing. 商品名デュオアクティブドレッシング)で褥創悪化と過形成をきたした。文献的にはI期～III期までの褥創にHCDの効果が報告されているが、本事例を通して使用にあたり深度や感染ばかりでなく個体側の条件が関与することを指摘している。II期のケアは主にインスリン療法とデブリサンで、III期は過形成の外科的切除術と軟膏及び抗真菌剤の局所療法であった。褥創の予防的効果も含めてHCDの適用条件を明らかにしていくことが今後の課題であろう。質問はガス分析、蛋白成分など個体側の成績に関するものであった。

演題2.「ターミナルケアにおける家族への働きかけについて」(武藤美智子さん)は、患者自ら欲求や希望を表現しない高齢のがん末期患者さんの家族への援助を振り返りでまとめた研究である。面会の少ない家族への働きかけを通して、無口で表現の少ない患者と家族のコミュニケーションが復活し、双方にとってよきターミナルステージを送ることができ

た。がん看護は患者と家族が援助の対象となるが、演者はこの事例においてもその重要性を確認できたと報告された。質問は入院時のオリエンテーションに関する質的な内容についてであった。

演題3.「抗悪性腫瘍剤による嘔気、食欲不振のある患者の援助」(寄田杉子さん)は悪性黒色腫患者のシスプラチン療法時の副作用に対し、食前に梅酒を試みた事例報告である。方法は梅酒を化学療法1日目より毎食前に5ml, 10日間飲用し1クール(梅酒導入前)と2クール(梅酒導入)の副作用を比較した。梅酒ケアの評価は一日の食事摂取量と内容、症状、訴えの量と質である。

梅酒の飲用で食事摂取量が若干増加し、嘔気が早く治まり食欲の回復も早くなったと報告。化学療法の副作用に対する看護的手立ては患者さんのさまざまな苦痛緩和に向けて、積極的に取り組まねばならないテーマであろう。梅酒に限らず嘔気、嘔吐など消化器症状の軽減に向け、追試を期待したい。

以上、3つの研究は事例を通して、がん患者の苦痛軽減への実践的な取り組みをまとめたものである。それぞれの事例には個別性や一般性が渾然として包含されているが、ひとつの事例の事実から妥当性のある共通項を抜き出し、どのような母集団に適用可能であるか検討していくことが重要であろう。がん患者の苦痛の改善に役立っていくケアを期待したい。